

事業所名	児童発達支援・放課後等デイサービスはっち	児童発達支援のプログラム	作成日	2025年	3月	31日
法人(事業所)理念	「ちいさな成功を、大きな自信に」 「すべての子どもに学ぶ機会の提供をする」					
支援方針	一人一人に合わせた個別最適なカリキュラムを提供すること 問題を課題に分けていき、スモールステップで支援をしていく					
営業時間	10時	～	17時30分	送迎実施の有無	あり	
支援内容						
本人支援	健康・生活	【生活スキル】日々の活動の中に必要な動作を組み込むことで、基本的な生活スキルが身につくように支援をする。 例)おやつ前の集団で手洗い、おやつ後にテーブルを拭く、落ちているものを拾う、体操後に掃除をする、帰りの会の前に自分のものを整理して準備する等 【構造化】活動場所、活動内容、担当の先生等、構造化、見える化して、見通しをつけやすく、過ごしやすいように支援をする。基本的に活動の時間や部屋の活動の入れ替えの順を固定化することで、ルールが分かりやすいようにする。 例)ボードに個別課題をやる場所、担当の先生が張っていて、おやつ後にボードを見て、それぞれの場所について課題を始める。課題は自分の名前がかいたかごに入っていて、められる子は自ら始める。3番の部屋:ボールなど体を動かす遊び時間→おやつを食べる時間→おやつ時間の後は体を動かす遊びは禁止(体を動かす遊びをしたい人は外遊びへ行く)等				
	運動・感覚	【微細・粗大運動】室内での昔遊びや折り紙、マット運動、ボール遊び、外遊びなどの遊びを通して、自然に獲得ができるように支援を行う。また自然な獲得が難しい場合には(代償動作がある等)、個別支援計画に取り入れて、個別課題として行い、苦手な動きでも自然場面でするように支援をしていく。 例)コマ回しにおいて、コマにひもをまく、手首を返すなどの動作を自然な遊びの場面で支援員が介入する。体幹機能が弱く四肢末梢に余計な力が入っていて、動作が妨げられている場合には、体幹機能を向上させるための基本動作を反復練習する等 【感覚】子どもの感覚特性に合わせて、椅子の高さの調節、机の調節、課題場所の調整、フロアマットをしく等行う。また、子ども本人が自分なりに調整できるようにカムダウンスペースを用意したり、貸し出し用のイヤーマフを子どもが取れる位置に置くなど配慮をする。				
	認知・行動	【数】数を獲得するうえで必要な「音(いち)」「記号(1)」「量(○)」の3つの概念の習得を支援する。また序数性(1番目2番目)、基数性(1つ・2つ)の両方を習得するために数の1対1対応から丁寧に課題を行っていく。 【状況の判断】時間を活動で区切ることで、適切な行動がとれるように支援する。「自由遊び」の時間においても「していい遊び」「してはいけない遊び」を部屋ごとに設けることで切な行動をとれるように促していく。また待機場所には視覚的にわかりやすいように支援を行い、適切な行動ができていときには、自らそれを確認ができるように配慮をする。 【適切な行動】机上課題で適切な行動を確認し、上記【状況の判断】などで確認を行っていく。自然場面でも机上課題で行ったことが汎化できているか、確認をすることで支援をしていく。 【不適切な行動に対する対応】まずは適切な行動のレパートリーを一緒にスモールステップで形成していく。またその過程で言語化ができるようであれば、言語化を促し、適切に切り合いがつけられるように支援をしていく。				
	言語コミュニケーション	【言語】構音や発語などへのアプローチを行う。言語聴覚士の指導の下LC-Rなどのスクリーニングテストを行い、現在必要な課題を特定し、スモールステップでアプローチする。また言葉を「質」と「量」の両面から考え、語彙を増やすのみならず、豊かな言葉が構築できるように、連想できる言葉や体験と一緒に作っていく。また文字を理解する前の段階として「形」「色」「音」などの要素を確認していく。また一部音韻処理が苦手、形と音が結びつきにくい子どもについては、触覚を使用する等、適切な学習方法を模索する。 【コミュニケーション】 自然場面ではうまく子どもとコミュニケーションが取れるように、適宜フィードバックを入れながら会話を行う。コミュニケーションが一方向的、また理解が難しい等がある場合には机上課題でフォローを行う場合もある。その際は疑似的な会話を構築したり、因果関係を整理したりする課題を行い、それが自然場面でも生きるように支援をしていく。また必要であればコミュニケーションの代替となりえる手段を模索する。絵カード交換やマカトン法などを使用する場合がある。				
	人間関係社会性	【信頼関係】一貫した行動を支援員がとることにより、見通しを持った人間関係が築けるように支援する。また一緒に遊んでよいことがあった、頼んで良い結果が返ってきた、助けられてうれしかったなどの体験を積み重ねることで、まずは大人と適切な関係が結べるように支援する。 【遊び】機能的な遊びから象徴的な遊び、一人遊びから、集団での遊びができるように自由遊びの時間で支援員が介入する。決まった遊びを決まったルールでできるところから、他人と遊びやルールをつくって遊べるまで、段階をおって支援する。特に個遊びになりやすい子どもについては、事前に遊びに必要なスキルが備わっていることを確認しながら自由遊びの時間も支援員が少しずつ集団での遊びに参加できるように声掛けや遊びの様子を見せるなど、支援をしていく。				
家族支援	送迎時のフィードバック、支援員から療育内容の報告、面談2回/年)、困りごとや発達特性などに関する相談(随時)、就学に向けた相談	移行支援	就学支援シートの作成(子どもに関する情報伝達、具体的配慮の方法、移行先での環境調整などについて記載)			

<p>地域支援・地域連携</p>	<p>地域の支援機関との連携(他通所支援事業所、相談支援事業所)、医療機関・児童相談所などの専門機関との連携、保育園など登園先の関係者との連携、個別のケース会議の参加、協議会への参加、地域向け研修の実施</p>	<p>職員の質の向上</p>	<p>資格の取得、研修の参加を積極的に支援 ・社内で心理師や言語聴覚士の研修実施 ・マカトンのレクチャー・研修参加 ・年2回の全社での研修 ・社外研修の参加費補助</p>
<p>主な行事等</p>	<p>特になし</p>		